

ルネサンス・ヒューマニズムの意義 特にフランスとドイツの場合

根占 献一

まえがき

本稿は、2006年3月のシンポジウムでの報告を元に、他のパネリストの発表を勘案して執筆された。報告者の一人に私を指名してくださった、このシンポの企画者である小林雅夫教授には心より感謝を申し上げたい。重い任ではあったが、東ローマ（ビザンツ）のエンキクロス・パイディアを報告された和田廣先生と、近代ドイツのフマニスムスを扱われた曾田長人先生に挟まれる形で発表し、有意義なひと時となった。お陰で、ヨーロッパ文化の根幹に関わる、古代から現代までの長大な「ヒューマニズム」問題が明瞭になったのである。

報告は、本論の注に出る両拙著に基づいていた。したがって、読者にはこれらの著書を手にしていただければ、と願う。それにより、小林、和田両先生のヒューマニズムに関わりがあることが判明するであろう。本論では、ルネサンス文化の中心たるウマネージモ、ヒューマニズムの理解のために、会場での発表と違い、渡辺一夫のフランス・「ユマニスム」を取り上げた。渡辺はわが国でこの概念形成に寄与した、もっとも重要な研究者と考えるが故にである。さらに、イタリアから「フマニタス研究」を移入しながら、自意識の強い文化を発展させたドイツ・「フマニスムス」、そして、特に北方地域に後々まで影響をおよぼすことになるルドルフ・アグリコラとその一作品に触れた。シンポでは、アルベルティの若い時の *De commodis litterarum atque incommodis*、最晩年の *De ichiarchia* を取り上げることで、学者（ヒューマニスト）の理想と現実を考えてみたのだが、この小論ではゲルマンの文化状況とアグリコラにこれを探ってみた。これは、「人文主義」の問題を曾田先生の御報告や御著書と、より緊密化させたかったからである。

最後に、このシンポにコメンテーターとして参加された、東北大学大学院教授の畏友、加藤守通氏にもお礼を申し上げたい。別のシンポジウムを控えているなかで、私からのたつての願いに時間を割いていただき、会がいつそう盛り上がることとなった。

(1) フマニタス研究

ヒューマニズムは曖昧な概念であると言われる。幾つかの意味があることは確かだが、曖昧な概念とは思われない。基本的に19世紀以降のこの概念を、他の時代に用いる際に問題が生じるのであろう。ヒューマニズムという言葉は、15、6世紀のルネサンス時代にはなかったが、この時代にこそ、用語ヒューマニズムを創出する条件が整ったし、この用語の核となる成句が多用されるようになった。そしてその成句はかなり明瞭な、一定の意味を持っていたことが、史料上から確定される。したがってルネサンス時代に立ち返るなら、ヒューマニズムという術語には、決して見落とせない要素があるということになる。

では、その成句とはなにか。それは「フマニタス研究」(studia humanitatis)である。最初の用例は古代のキケロにあるが、長い中世には使われず、14世紀後半から、古典に関心を有するイタリア人が盛んに用い始めたものである。たとえば、ふたりのフィレンツェ共和国書記局官長、コルッチョ・サルターティ(1331-1406年)やレオナルド・ブルーニ(1370?-1444年)の書簡や著述に用例を見ることは容易である。また、これの具体的な内容を表わす事例は、ブルーニの書記官長時代に現われる。それによると、文法、レトリック、歴史学、詩学、道徳哲学を指している。これは、トンマーゾ・パレントウチェッリ 後にローマ教皇ニコラウス5世(在位1447-1455)となる がフィレンツェのサン・マルコ修道院所蔵の書籍分類の際に用いた基準に見られる¹。また、北イパドヴァ大学で学んだペーター・ルーダーが、地元ドイツのハイデルベルク大学で、フマニタス研究の「詩人・雄弁家・歴史家の著書を公に」講義するとしたのは、その18年後の1456年のことであった。こうしてフマニタス研究の指示する内容はたちどころに、アルプス以南・以北に拡大したのである²。

さらに、こういう中でヒューマニスト(フマニスタ、ウマニスタ)という用例が15世紀末にはイタリアに登場する。次世紀に入ると、これまた広範にヨーロッパに普及するのみならず、西洋文明の影響を受けた地域、近世日本の文献にも見られるようになる。ギリシャ・ローマの古典に通暁した詩人や雄弁家、歴史家が、一言でいえばヒューマニストである。彼らは大学の古典学教師や教育関係者であることもあるが、官吏や秘書官でもある場合も数多あり、実務に強い教養人という性格を有していた。外交官、大使もまた雄弁家と呼ばれ、演説は本職に不可欠であった。説教を行なう聖職者のなかにも古典の影響を受ける人たちが出てくるのは、この分野でも雄弁が求められたからである。フマニタス研究が古典の学者・研究者を育成するためにのみあったと考えるのは、不正確である。

(2) 渡辺一夫のフランス・「ユマニスム」

ところが、ギリシャ・ラテンの古典語となんらの言語学的類縁性を有さぬ日本語世界では、概して大学で古典を教える、あるいはこれに通暁した教師でルネサンスを専門にする学者に、ヒューマニストのイメージを当て嵌めがちであり、職域を極端に限定してしまっている。たとえば、東京大学教授だった渡辺一夫はその典型と映らう。フランス・ルネサンス文学研究と翻訳の泰斗であった氏の業績は絶大であり、その影響を受けた人は学内外に多い³。そのため、英語のヒュー

¹ 根占献『共和国のプラトンの世界 イタリア・ルネサンス研究 続』創文社、2005年、36頁。Cfr. Giovanni Sforza, *Papst Nicolaus' V. Heimat, Familie und Jugend*, deutsche Ausgabe von Hugo Th. Horak, Innsbruck, 1887, 67, 222 n.52.

² 根占、前掲書、同頁。Erich König, *Studia humanitatis und verwandte Ausdrücke bei der deutschen Frühhumanisten*, in *Beiträge zur Geschichte der Renaissance und Reformation*, München/Freising, 1917, 202-207. ルーダーについては特に Rudolf Kettermann, Peter Luder (um 1415-1472). Die Anfänge der humanistischen Studien in Deutschland, in *Humanismus im deutschen Südwesten. Biografische Profile*, herausgegeben von Paul Gerhard Schmidt, Stuttgart, 2000, 13-34.

³ 『渡辺一夫著作集』筑摩書房、増補版1976-77年、全14巻。大江健三郎『日本現代のユマニスト渡辺一夫を読む』岩波書店、1984年。

マニズムやヒューマニストでなく、フランス語のユマニスム (humanisme) やユマニスト (humaniste) を用いて、ルネサンスの知識人、学者を表わそうとする人もいる。好例は、ペトラルカ思想の研究と翻訳に主力を注いでいる近藤恒一に見出される⁴。これは、英語の言い回しが出回りすぎて、やや摩滅しかかった通貨の観を呈し、人道主義や博愛主義者を連想させるのに比べ、新鮮さを感じさせずにはおかない。

フランス語表現に留まらず、学殖に裏付けられた文学者、渡辺のエスプリの効いた文体がまた、「フランス・ユマニスム」をこのうえなく魅力的なものにしているのだが、他方でまた、一般向けの著述があり、注目される⁵。これらのなかで、氏がたびたび引用する言は「それがキリストとなんの関係があるのか」(Quid haec ad Christum) という句であり、形式に囚われる教会制度や、権威を持ち続ける旧弊なスコラ学が批判される。非キリスト教地域の日本では、ルネサンスの「新思想」に感情移入は容易であり、氏の戦時中や戦後の生き方と相まって、「15年」戦争期と暗黒の西欧中世が重なり、進歩的・開明的「ユマニスム」感が増幅される。神学部があり、スコラ学の牙城であったパリ大学は、ルフェーヴル・デターブルやフランソワ・ラブレ、ギヨーム・ピュデなどには、まさに前代の伝統を引きずる無知蒙昧の代名詞であり、批判の対象となった。

だが、歴史的総体は常に複雑であり、多面的である。イエズス会に結集するイグナティウス・デ・ロヨラやフランシスコ・ザビエルはここで学んでいたのである。同会の保守性をいかに指摘しようとも、誕生は「新時代」に属している。この事実は動かないし、彼らの活動はこの大学を守ることでなければ、パリに留まり続けることでもなかった。それでも、デシデリウス・エラスムスやラブレらが風刺したアリストテレスやトマス・アクィナスは、イエズス会により近代に新たな命を得たのである。したがって、「キリストとなんの関係があるのか」という一句で、この時代の錯綜し、激変する社会と対比させるのは、やや直感的なきらいがある⁶。

この言だけなら、制度は不要と響く。実際のエラスムスはローマ教皇を頂点とする教会制度を否定しなかったし、キリスト教が歴史的に形成されてきた traditio は彼が重んじたところであった。渡辺により邦語世界に生き生きと姿を見せたラブレも教会を離れないどころか、ある意味でエラスムスより保守の面があった。また、このキリストを人間となった神、あるいは磔刑化された神と見なす神学思想は一段と強化され、新旧の対立は激しくなった。宗教改革者間では、聖餐時のパンとキリストをめぐる解釈での一致は不可能であった。

「それはキリストとなんの関係があるのか」の問いかけから、渡辺が期待していた「それは人

⁴ 『2005年小平市花小金井南公民館夜間講座 日本から見たヨーロッパ文化』(非売品、[2006年])、169-170頁。

⁵ 『へそ曲がりフランス文学』光文社カップブックス、1961年。『私のヒューマニズム』講談社現代新書、1964年。これらもしかして文体の香気を失わず、特に前者は叙述も詳細。またこちらは、『渡辺一夫著作集』8、1977年、113-371頁に「曲説フランス文学」と題され、加筆訂正のうえで所収。

⁶ 渡辺は「旧教会内部に生まれた懸命な自己粛清運動」の例として、イグナティウス・デ・ロヨラのイエズス会に関心を抱いていた。『同著作集』118頁。また、同氏はこのような宗教運動とともに、ヨーロッパの地理的拡大とそれがもたらした思考上の変化にも、ルネサンス時代の重要性を見出している。たとえば、『同著作集』3、73-79、112-113頁。

間であることとなんの関係があるのか」(Quid haec ad humanitatem)の現代的物言いまでは、ヨーロッパでは長期の過程が横たわり続けただけでなく、また依然として完全な移行は実現されていないのではなからうか。「『それはメルクリウスとなんの関係があるのか』の(古代)精神が、『それはキリストとなんの関係があるのか』という(ルネサンスの)問いのなかに宿り続け、さらに、『それは人間であることとなんの関係があるのか』といい改められて、近代・現代にも生き続けているのです。この事実は忘れやすいことかもしれませんが、忘れてはなりませんまい」⁷。フランス文学を介して「ユマニズム」概念に知悉した氏であったが、歴史的用法を越えて自身の「世界観」を示したことにより、ヒューマニズムは問題を孕む語法ともなっているのである。啓蒙思想と実存主義の国は氏の「ユマニズム」を理想主義的な人生行路にした⁸。

(3) ドイツ・「フマニズム」とイタリア

先の「人間であること」という語句は、渡辺では対応する語が *humanitas* であり⁹、これは前出のフマニタス研究に含まれている語である。ルネサンス期の人々はキリスト者としての存在以外に、同研究を修めた者を人間として考えていたであろう。つまり人文学を身に付けた者を人間らしい人間として扱ったのである。宗教的にも教養的にも、この時代の人間はこのような個性的性格を与えられ、現代のようにこれらと無縁の、単なる人間、自然的人間の段階に留まり続けるのは難しい。ボッカッチョの『デカメロン』(*Il Decamerone*)は性愛的自然を称える一方で、礼儀・教養の修得による人間性開花を重んじている¹⁰。ルソーの自然状態だけでは芳しくはなかったのである。

ドイツのルネサンスとヒューマニズムはこの特質を考えるうえで、非常に役立つ。それはドイツがラテンの地ではなくゲルマンの野であるとともに、意識上、古代ローマの皇帝に繋がる支配者を出す地域であったからである。ゴシックの大地として、ローマ文化に対する変わらざる負い目は、時に対抗意識となって現出する。古代ローマの史家の手になるとはいえ、あるいはそれゆえにと言うべきか、タキトゥスの『ゲルマーニア』(*Germania*)からはドイツ人の原点が立ち現われ、彼らの愛郷意識昂揚に貢献した。純朴な古代ゲルマン人の生き方は爛熟したローマ人の日常性と対比され、過去を知る、いいよすがを提供する。

そして今は、アルプス以南の現代文化、つまりルネサンス文化に対する羨望からイタリアの地を踏む、数多くのヒューマニストが出、ゲルマンを文明、教養・学識の地にしようと努める。フマニタス研究の範囲に限って言えば、史料批判に秀でていたロレンツォ・ヴァツラ(1407-1457)

⁷ 渡辺 『私のヒューマニズム』55頁。引用内の括弧文は引用者による。

⁸ 同上 『へそ曲がりフランス文学』262-263頁。Cf. 根占 『フィレンツェ共和国のヒューマニスト イタリア・ルネサンス研究』創文社、2005年、47頁。サルトル哲学が一世を風靡する以前の、フランス知識人のユマニズム観を知るうえで参考になるのは Fernand Robert, *L'humanisme. Essai de définition*, Paris, 1946. Cf. 『渡辺一夫著作集』5、200-201頁。

⁹ 渡辺 『へそ曲がりフランス文学』17-18頁など。

¹⁰ 『デカメロン』(中) 柏熊達生訳、筑摩書房、1996年、16-20頁(第4日第1話) 143-147頁(第5日第1話)

の仕事や、信心深い、カルメル会総会長ジョヴァン・バッティスタ・スパニヨリ（バプティスタ・マントヴァヌスあるいはバッティスタ・マントヴァノ）（1448-1516）の詩などはゲルマンの人々を魅惑した。神聖ローマ皇帝マクシミリアン 1 世（在位 1493-1519）のドイツはそのような時代であり、中世の終焉と「新時代」の開始を告げている。ミラノ公女マリア・ピアンカ・スフォルツァとの再婚（1494 年）は、最後の中世騎士と呼ばれるこの皇帝の、イタリアへの諸々の関心を強化した。

マクシミリアン時代の初期ヒューマニストの代表はコンラート・ツェルティス（1459-1508）であろう¹¹。ツェルティスは、この皇帝の父フリードリヒ 3 世により、1487 年ニュルンベルクの地で桂冠を与えられ、詩人としての名声を確立した。フリードリヒ 3 世は随分以前の 1442 年に、フランクフルトの地で、イタリア人のエネア・ピッコローミニ 後のローマ教皇ピウス 2 世（在位 1458-1464）を桂冠詩人（poeta laureatus）にしていた。ピッコローミニはゲルマンの地と縁が深く、ウイーンの宮廷でも活躍したヒューマニストであった¹²。また、フリードリヒの従兄弟ラディスラウス王に献上した教育論は名高いが、粹人でもあり、ラテン語で書かれた恋愛譚はドイツ語にも訳されて親しまれた¹³。

マクシミリアンに献上された、ツェルティスの『愛の譜』（*Amores*）には異教のもたらす愛の高調と美の官能が突出し、4 都市での、それぞれ異なる気質の 4 女性との愛が詠われる。多面では、ピュタゴラス風の数秘学と占星術的人間観も目立っている。これにはアルブレヒト・デューラーによる木版画が添えられて、紙価を高めた¹⁴。フィレンツェの哲学者フィチーノを介してのプラトン主義の影響は、フォン・ベツォルトの研究が明らかにしている¹⁵。また、ツェルティスはベネディクト派修道院長ヨハン・トリテミウスとは親しく、ともに魔術的な思想世界に生きていた。

先の『ゲルマーニア』を刊行したのはこのツェルティスであり、この著作をよく研究していた。自国中世の神学や哲学に対する関心も深く、反イタリアの感情も強かった。彼によれば、ロズヴィータの写本に示されるように、中世のドイツは暗黒ではなかった。しかもそれは女性の手にな

¹¹ Friedrich von Bezold, Konrad Celtis, der deutsche Erzhumanist, in id., *Aus Mittelalter und Renaissance. Kulturgeschichtliche Studien*, München/Berlin, 1918, 82-152, 391- 399. 後者の数字は注のページに相当し、最初の頁（82）に、論文初出は *Historische Zeitschrift*, XLIX(1883)とある。ツェルティスを時代精神とともに描く。Lewis W. Spitz, *Conrad Celtis. The German Arch-Humanist*, Cambridge, Mass., 1957. Id., *The Religious Renaissance of the German Humanists*, Cambridge, Mass., 1963, 81-109. 後者の研究書はツェルティス以外に、アグリコラ、ヴィンブフェリンク、ロイヒリン、フッテン、ムティアヌス、ビルクハイマー、エラスムス、ルターを含む。

¹² Enea Silvio Piccolomini, *Vienna nel '400 dalla Historia Friderici III imperatoris*, versione e prefazione di Baccio Ziliotto, Trieste, 1958. Id., *Deutschland. Der Brieftraktat an Martin Mayer und Jacob Wimpfeling's Antworten und Einwendungen gegen Enea Silvio*, übersetzt und erläutert von Adolf Schmidt, Graz, 1962.

¹³ Id., *De liberorum educatione*, ed. Joel Stanislaus Nelson, Washington, 1940. Id. *Eurialus und Lukrezia. Eine Liebesgeschichte*, Berlin, s.d..

¹⁴ Felicitas Pindter, *Conradus Celtis Protucius: Quattuor libri Amorum secundum quattuor latera Germaniae. Germania generalis. Accedunt carmina aliorum ad libros Amorum pertinentia*, Leipzig, 1934. 木版画は Spitz, *The Religious Renaissance of the German Humanists*, 101-102 に挿絵 3 として所収されている。

¹⁵ Von Bezold, *op.cit.*, 121-134.

る劇作であった。反ラテンの感情は彼をギリシアに近づけ、ドルイド僧に夢を膨らます。昔のゲルマン人たちは本来的にギリシア語を喋っていなかったにしても、これを語り、ギリシア人風の生を送るドルイド僧により、その文化には案内されていたという¹⁶。彼は、異教のイタリア・ルネサンス文化でなく、スパニョリの敬虔な詩を高く評価したヤーコプ・ヴィンプフェリンクや、ヴァッラのコンスタンティヌス寄進状批判をローマ教会攻撃に利用したウルリヒ・フォン・フッテンと同類であった。このフッテンは宗教改革の勃発によりさらに筋金入りの愛国者になった。

なお、後述し、その一作品を取り上げるルドルフ・アグリコラは、ツェルティスのハイデルベルク大学時代の師である。当時のハイデルベルクは、アグリコラとその親友、ヨハンネス・フォン・ダルベルクにより学芸の宮（Musenhof）であった¹⁷。ヴォルムス司教にしてプファルツ伯官長ダルベルクはツェルティスのよき理解者であった。アグリコラ（フロニンゲン出身）もドイツ（ゲルマン）圏のヒューマニストと見なして、考察を進めることになる。彼は同郷のエラスムス（ロッテルダム出身）が「ヒューマニズムの王者」に成長するにあたり、少なからぬ影響を及ぼした、「北方」ルネサンスの輝ける星であった。

長い時間が流れ、神聖ローマ帝国が滅亡（1806年）した頃に、ドイツは「フマニスム」（Humanismus）つまりヒューマニズム概念の発祥の地となり、これをめぐって、以後、秀逸な研究者を送り出した国となった¹⁸。

（4）アグリコラの略伝と『ペトラルカ伝』

フマニタス研究の頻出やヒューマニスト概念の初出以前の段階で、後のヒューマニズムの代表的人物となるのは、ペトラルカであった。彼が「ヒューマニズムの父」と呼ばれるのは、彼の文学作品が詩創作以外に、書簡・道徳論・駁論と多面にわたってその模範となったことが大きい。これらにおいて、ペトラルカは中世に権威となったアリストテレスでなくてプラトンの思想を礼賛し、中世のスコラ学者でなくて古代の教父のキリスト教を憧憬する。他方で、ラテン語によるキケロの雄弁、セネカの哲理を重んじて、その印象深い言葉を取り出して自らの思想を語り、同時代と後世の読者を魅惑したのである。そのようなペトラルカに注目し、重要な彼の伝記（*Vita Petrarcae illustrata per eruditissimum virum Rudolphum Agricolam Phrisium ad Antonium Scrofinum Papiensem. Anno salutis 1477 Papiæ.*¹⁹）を物したヒューマニストのひとりが、主著

¹⁶ Spitz, *Conrad Celtis*, 100-101.

¹⁷ Von Bezold, *op.cit.*, 86.

¹⁸ 根占『フィレンツェ共和国のヒューマニスト イタリア・ルネサンス研究』、33-34頁。曾田長人『人文主義と国民形成 19世紀ドイツの古典教養』知泉書館、2005年。この大著に関しては、根占「ヒューマニズムとドイツ・ネーション 2004年～2005年ヨーロッパ研究の一動向」『学習院女子大学紀要』8（2006年）、167-172頁参照。

¹⁹ Ludwig Bertalot, *Rudolf Agricolae Lobrede auf Petrarca*, in id., *Studien zum italienischen und deutschen Humanismus*, herausgegeben von Paul Oskar Kristeller, Roma, 1975, II, 1-29, 特に2-20に『ペトラルカ伝』（*Vita Petrarcae*）が含まれる。この論文初出は *La Bibliofilia*, 30(1928-29), 382-404。前者の所収論文では編纂者により関連文献が補足されている。重要な論文に Theodor E. Mommsen, *Rudolph Agricola's Life of Petrarch*, in id., *Medieval and Renaissance Studies*, ed. Eugene F. Rice, Jr., Ithaca/ New York, 1966(1959), 236-261。この論文初出は *Traditio*, VIII(1952), 367-386。

『弁証法的発想論』(*De inventione dialectica*) (1479 年成稿。1515 年初版、ルーヴァン)で知られるアグリコラ (1444 - 1485) である。

彼はヨーロッパ各地で研鑽を積みながら、イタリアには長期滞在し、ほぼ 10 年を過ごした。10 代の初めにフロニンゲンからエルフルトに移動して開始された本格学習は、ここイタリアで仕上げを迎えることになる。この南欧時代は、1479 年にアルプスを越えて故郷に戻るまで、主にフェッラーラで展開されている。ここでは、エステ家の宮廷文化が栄え、フマニタス研究とギリシア語教授、古代哲学の探究が活発で、また伝統的に教育の盛んな土地柄として知られていた。パヴィアでの法律中心の勉強から、ギリシア語力の更なる向上のためにフェッラーラに移ったともいえよう²⁰。

同時代の証言は、このヒューマニストが古典のギリシア、ラテン、ヘブライの各語に限らず、俗語 (イタリア語) にも巧みであったことを伝えている。また美術や音楽に通じ、運動能力も高かったことが知られている。彼もまた、この時代の「普遍人」(*un uomo universale*) であつたのであろう。「普遍人」の先行者レオン・バッティスタ・アルベルティもフェッラーラに縁の深い人物であつたから、人間の理想として彼の噂を聞くことがあつたかもしれない。当時のイタリアがいかに高度な、力強いルネサンス文化を展開していたかが、この北方の偉才から明らかとなり、その活動を追う時に感動さえ覚える。

帰国後は多忙な日々がアグリコラを待っていた。ヒューマニストとして、既出のルーダーのように、北方世界にルネサンスを導いた大功績者であつたものの、イタリアとは異なる社会環境に不満を感じ、不平を漏らすこともあつた。これは、デューラーの場合と酷似している。この画家はヴェネツィアとニュルンベルクの違いを痛感した。アグリコラはイタリアに戻りたがっていた。84 年 9 月、新教皇にインノケンティウス 8 世選出の報が入った。翌年の春、この祝意の外交使節の一員となり、ローマを目指してブレンネル峠を越えて南国に入った。懐かしいフェッラーラにも泊まり、旧交を温めることができた。ダルベルクのヴァティカンでの演説は 7 月に行なわれたが、この草稿はアグリコラの手になるものである。帰途ヴェローナで高熱を発して病に倒れ、ハイデルベルクに戻りつくまで長期の滞在を余儀なくされた。司教の腕のなかで息を引き取つたのは、程ない 85 年 10 月 27 日のことであつた²¹。

『ペトラルカ伝』は、同時代のイタリアの著名なヒューマニスト、ピエロ・カンディド・デチェンブリオ、あるいはフランチェスコ・フィレルフォによる記述などが参考になつたものの、それよりも、より詳細にしかも深い洞察をこの伝では展開し、古典学芸の復興者としてのペトラルカ像が鮮明に描かれる。そのことは、パヴィア在のアントニオ・スクロヴェニ (スクロヴィニ)

²⁰ Jozel Ijsewijn, Agricola as a Greek Scholar, in *Rodolphus Agricola Phrisius (1444-1485)*. Proceedings of the International Conference at the University of Groningen 28-30 October 1985, ed. F. Akkerman and A. J. Vanderjagt, Leiden/New York/København/Köln, 1988, 21-37, 特に 23-24. Agostino Sottili, *Notizie per il soggiorno in Italia di Rodolfo Agricola*, in *ibid.*, 79-95.

²¹ William Harrison Woodward, *Studies in Education during the Age of the Renaissance 1400-1600*, with a Foreword by Lawrence Stone, New York, 1967(1906), 79-103, 特に 98-99. Spitz, *The Religious Renaissance of the German Humanists*, 20-40, 特に 24.

への献呈の辞に続く最初のところでまず言われ、最後に結びで繰り返される²²。このようなペトラルカの史的な位置づけは、レオナルド・ブルーニやジャンノツォ・マネッティによって既になされていたから、事新しくはないが、同郷でない、北欧のヒューマニストによっても共有されている点が興味深い。作者アグリコラはパヴィア大学で法律を勉強した身であったが、フマニタス研究 ここでは同義語の *humanitatis artes* が用いられている に魅惑されていた点では、同じ法学生のペトラルカと共通していた²³。

ペトラルカの恋人がラウラであることは有名な話で、アグリコラも彼女との出会いが詩人の心中に及ぼした感性的動向を好んで分析しているように思われる²⁴。これにはアリストテレスやストア派の哲学による情緒分類が影響を与えているにしても、学者ペトラルカの、望ましい静穏な生との対比もまた、作者の関心を惹いたのであろう。アグリコラは生涯独身を通したヒューマニストであった。このコンテクストで面白いのは、教皇ウルバヌス 5 世がペトラルカにラウラとの結婚を勧奨したという逸話である。これに対しアグリコラは、レトリックを駆使してペトラルカに演説させ、断らせるのである²⁵。

その他、旅行 (*peregrinatio*) など一所不住の生活と学識取得との関係が論じられる箇所²⁶は、よく旅をしたペトラルカでもあり、また知を求めて留学していたアグリコラでもあり、興味深い。献辞でも、アントニオの祖父エンリーコもまた多くの旅をし、これからたくさんのことを学んだことが指摘されている²⁷。周知の桂冠詩人となる儀式²⁸や、彼のこの時のパトロンであるナポリ王ロベール (ロベルト) 王、また他のパトロンたちの名前、ペトラルカの作品名などを見出すことができる。また、死の原因、癩癩 (*morbis comitialis*) を述べた箇所では²⁹、サヴォイアのアメデオ公も同じ病で先の年に亡くなったと、同時代の出来事に言及し、『ペトラルカ伝』執筆の年号を教えている。公の死去は 1472 年 3 月 3 日のことである。そのため執筆時期は、1473 年から 1474 年にかけてということになるだろう。伝自体はペトラルカ没後 100 周年を記念する意図があったであろうか。元来は、フェッラーラからパヴィア再訪の折に、当地の大学での演説として行なわれたかもしれない³⁰。最後に、外貌と精神、性情、つまり人となり、なども詳細に書かれていることを指摘しておきたい³¹。

ペトラルカがダンテ、ボッカッチョと並んで、ヒューマニズムの文化と文学の進展を考えるうえで重要人物であることは、改めて強調するまでもない。彼らがどのように理解され、位置づけ

²² *Vita Petrarcae*, 3, 20.

²³ *Ibid.*, 5.

²⁴ *Ibid.*, 6-7.

²⁵ *Ibid.*, 7-8.

²⁶ *Ibid.*, 10-11. ここには特にベルタロートは詳細な注を施している。

²⁷ *Ibid.*, 2.

²⁸ *Ibid.*, 12-13.

²⁹ *Ibid.*, 16.

³⁰ Bertalot, *op.cit.*, 21. *Rodolphus Agricola Phrisius (1444-1485)*, 313-344(Bibliography), 特に 316. Woodward, *op.cit.*, 89. Cfr. Mommsen, *op.cit.*, 240-241.

³¹ *Vita Petrarcae*, 16-19.

られてきたかは、時代を知るためにも必須なことである³²。アグリコラの作品はルネサンス時代に印刷されず、また大作とは言えないにしろ、イタリアの古典文化に憧れる北方人のペトルルカ観をよく語っている。今日なら、このイタリア人の『後世への書簡』(*Epistola posteritati*)はその内面と生を知るために不可欠であり、利用しない研究者はいないであろう。だが、アグリコラはこれを活用しなかった³³。活用しなかったとはいえ、彼らの間の一世紀は一時代に、ルネサンスという時代に括れるものであった。「後世」はまだ近未来であっただけではない。アグリコラの古典文化への憧憬が、なによりもペトルルカを大先輩として身近な存在にしたのであり、ルネサンス以後の遠い人間は、もはやこの感覚をなかなか持つことができない。ましてや、この文化を抜きにしてルネサンスを語ったうえに、社会史的諸問題があたかもルネサンスの原義に連関するように描く国にあっては不可能であろう。

³² *Le vite di Dante, Petrarca e Boccaccio scritte fino al secolo decimosesto*, raccolte da Angelo Solerti, Milano, 1904. この大著に収録された三文豪のうち、もっとも頁が多いのはペトルルカである。Cfr. 根占 『フィレンツェ共和国のヒューマニスト』 84 頁。

³³ Mommsen, *op.cit.*, 243.